

(3) 「聖霊によって宿り」

村上 伸

イザヤ書 9 章 1 節-6 節
マタイによる福音書 1 章 18 節-25 節

クリスマスの礼拝をご一緒に守ることができまして心から喜んでいきます。「使徒信条」についての連続講解説教の 3 回目ですが、丁度クリスマスに当たりますので、「聖霊によってやどり、おとめマリアより生れ」という所についてお話をしたい。イエス・キリストに関する信仰の告白ですが、昔から、とくに「おとめマリアより生まれ」という項目にはなかなか問題がありました。

学生時代に、スイスの著名な神学者であるエーミル・ブルナー先生が、国際キリスト教大学で、1 年間教えておられて、大きな影響を残された。神学校にも講義にいられました。ところが彼は、使徒信条を唱和する時に、「おとめマリアより生まれ」というところを余り大きな声では言わない、という噂が学生の中に伝わったことがあります。そして、確かにある日の講義の中で、このことは積極的に取り上げるつもりはないという感じで言われたこともあります。

これも聞いた話ですが、アメリカに暮らしておられる我々の古い仲間がこの礼拝に出席されまして、「おとめマリアより生れ」というところをアメリカのある教派では最近削除した、と言っておられました。私はまだ確かめていないのですが、どうもこの所は躓きに満ちておりまして、余り信じられないという方々が多いようであります。私たちはその所をどう考えていったらいいのでしょうか。

私は一つの点から出発したいと思います。

新約聖書に福音書が四つあって、一番古いのはマルコという人が書いた福音書ですが、この福音書にはイエスの誕生の物語はまったく出てきません。誕生の物語を書いているのは、マタイとルカです。ヨハネによる福音書はいくらか哲学的な、抽象的な形でその事を述べております。最も古い福音書にはこの話がなかった。このことが私たちの考えの一つの出発点になると思います。

それはどういうことかと言いますと、処女懐胎を信じるか信じないか、といった問題ではないということです。そうではなくて、福音書を書いた人は、マルコでもマタイやルカでも、イエスの「事件」と言いましょうか、この世における彼の生と死、つまりイエスの事件に非常に心を打れた。彼らは、それに揺り動かされて福音書を書いた。マルコは誕生物語を書いてはいませんが、彼の福音書全般にわたって、このイエスの生きかたには何か非常に新しい特別なものがあると感じていたと思います。ですからイエスが十字架に架けられて亡くなったその現場にいあわせたローマの兵士が、「実にこの人は神の子であった」という感想を漏らした。これは、マルコ自身がイエスの生き方からそういう印象を受けたのだと思います。本当にこの人は神の子であった。そういう何かがある。彼は抽象的な神の観念とか概念から話を進めているのではなくて、歴史の

中で起こった一つの事件、イエスの事件から強烈な印象を受けて福音書を書いたのです。この使徒信条というものも、基本的にはそこから出てきていると私は信じています。

使徒信条は一人が書いたわけではありませんが、それをまとめた人々は、同様にイエスの事件に心を動かされて、この方こそイスラエル人が待ち望んだメシアであると信じました。イエスは「神の子」であるとか、「主なるキリスト」であるとか、そういう告白はそこから出てきたのです。

もともとなっていたのはイエスの事件であって、なんらかの神の観念ではありません。この信仰がさらに、今日の所では、「主は聖霊によってやどり、おとめマリアより生れ」という表現になったのだと思います。これはイエスの事件によって呼び起こされた彼等の信仰の表現です。ですから処女降誕というものが歴史的な事実としてあったかどうかということは余り大きな問題にはなり得ない。

キリスト教徒のなかにはそういうことが事実起こったのだと強引に言い張る人々があります。それはたいして意味のないことだと思います。逆に処女降誕というのは生物学的には不可能であるからと言って丸ごとこれを否定する人々もいます。これも同じ様に正しくはないと思います。あのイエスの事件に触れて、その深い感動から出てきた信仰の表現であると、そういう風に考えたらいいのではないのでしょうか。

「聖霊によってやどり、おとめマリアより生れ」と言う告白はそういう性質のものだと私はと思いますが、これはヨハネによる福音書の最初の部分に書かれている言葉の別の表現と考えていいでしょう。「言は肉となって、私たちの間に宿られた」(ヨハネによる福音書 1 章 14 節)いわゆる「受肉」ということです。「神が人となった」という受肉の奇跡です。

ある本に書いてあったことですが、「ニカイヤ信条」(325 年)の最も古い形では、この所は単に「我々の救いのために下り、受肉し、人となり」と書いてあったそうです。これは、少し概念的な書き方ですが、使徒信条はそれよりも遥かに色彩豊かな表現で受肉の奇跡を語っていると考えられます。

愚かで罪深い人間からみると無限に遠く離れていると思われる神が、人となって私たちのもとに来られ、私たちの間に住まわれた。イエスの生と死のすべて、そして彼の愛と真実は、まさにそのことを我々に知らせているのではなかったか。それは、人類の歴史において、非常に新しい、全く新しい事件であったのであり、人間の世界の中から自然に生じてくるような出来事ではありません。根本的に新しい出来事です。その事を、「聖霊によってやどり、おとめマリアより生れ」という言葉で表現しているのだと思います。

ここで、今日読んだイザヤ書 9 章の言葉に特に注目したいと思います。ここを讀んでおきますと、人間のこの世界が不正に満ちているということにまず注目させられます。人の世界はしばしば闇であり、死の陰の地です。1 節に「闇の中を歩む民は」と書いてあります、次の行にいけますと「死の陰の地に住む者の上に」と書いてあります。

私達の世界は、しばしば闇です。そして死の陰に覆われています。詩編 23 編にありますように、死の陰の谷を私達は歩いている。

それから 3 節には「彼らの負うくびき、肩を打つ杖、虐げる者の鞭」と書いてあります。つまり、私達の世界では、常に高ぶった者たちが権力を手にしている。彼等が富を吸い上げている。そして貧しく弱い者の肩には、くびきが負わされている。彼等は杖で打たれたり鞭で虐げられたりしている。この様な不平等は何時までも克服されることがありません。私達の国の事を考えてみてもそうです。

弱者がいつでもひどい目に遭います。いつになったらそのような不平等が無くなるのでしょうか。解放の神学者グティエレスは「構造的不正」ということを言いました。この社会には構造そのものが暴力的であるところから生じる問題がみちみちていて、ここでは弱い者がいつも泣いている。「闇の中を歩む民、死の陰の地に住む者」！

こういう世界ではまた、戦いが絶える事はありません。ですから 4 節には、「地を踏み鳴らした兵士の靴」とか、「血にまみれた軍服」と書いてある。そういうものが我々の世界では絶えることがない。兵士たちの靴がこの大地を踏み鳴らす。軍服がお互いに血にまみれる。

しかし、予言者イザヤは、そういう世界の中に神の力によって全く新しい事が始ると信じていました。キング牧師が「私には夢がある」と言いましたが、そういう夢を彼は持っていました。そういうことが完全に無くなる日がやがて来るだろう。神の力によって全く新しい事が始まる。だから 1 節に「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」これは過去形で書いてありますが、予言者の夢です。心からの希望であり、信仰です。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになり、人々はみ前に喜び祝った」

そして 3 節を読みますと「彼等の負うくびき、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を、あなたはミデアンの日のように、折ってくださった。」そういう暴力的なものは折られるということです。4 節には、「地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく、火に投げ込まれ、焼き尽くされた。」暴力的なものが終り、そして平和が来る。こういう全く新しい世界の出現を、イザヤは非常に印象的な言葉によって描き出しています。それが 5 節です。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。」一人のみどり子が誕生する。つまり、歴史の中に新しいことが神の力によって始められるということをもイザヤは語ったのです。

同じことをマタイも言っています。マリアが身ごもって男の子を産むと言った後で、彼はイザヤ書 7 章の言葉を引用する。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」(14 節)一人の赤ん坊の誕生というイメージで新しいことを語っています。使徒信条の語り方も本質的に同じだと思います。

先程話しましたように、「ニカイヤ信条」の古い形では、「我らの救いのために下り、受肉し、人となり」という表現でしたが、こちらの方には敢えて言えば、色彩が余

りありません。概念的ですが、しかし使徒信条は「聖霊によってやどり、おとめマリアより生まれ」と言います。新しい事が始まるという事をそういう形で表現した。これは素晴らしいことではなかったでしょうか。「おとめマリアより生れ」という形で告白せずにはおれなかったのです。福音書の記者たちが生身の女性マリアの受胎と出産の物語を書かずにはいられなかったのも同じことです。

「聖霊によって宿り」というのは、イエスの事件は、人間の世界の中に内在する可能性によって自然に生じてきたものではなくて、全くただ神の力によって、新しくこの世界の中に始まったことだと言っているのです。「聖霊によって」宿ったというのはそういうことです。系図の上ではイエスの父親であるヨセフは、全く出番がありません。カール・バルトの言葉を借りますと、ヨセフはイエスの肉体上の父であることから締め出された。名簿の上ではお父さんですが、全く何の役も演ずる事はできない。それはただ神の力による。聖霊によって、新しいことが始まった。そして「おとめマリアより生れ」というのは、それと表裏の関係にあるかも知れませんが、一人の生身の女性の身体から生まれたということです。現実はこの世界の中に、一人の人間として生まれてくる。そして我々と共に生きられた。イエスはそういう方であった。現実の人間であった。決して観念として人間ではない。私たちと同じ様に色々な苦しみに会われ、私たちと同じように嘆き悲しみ、そういう事を経験して私たちと同じように死んでいかれた方。しかし私たちに先駆けて甦られた方。だからそれは神の力によって起こった全く新しい出来事ですが、しかし現実にはこの世界の中で起こった出来事でもある。こういう事をこの「使徒信条」は私達に語っているのではないかと思います。

(日本基督教団みくに伝道所 1996年12月22日 礼拝説教)